

二葉亭余談

内田魯庵

青空文庫

一 二葉亭との初対面

私が初めて二葉亭と面会したのは明治二十二年の秋の末であった。この憶^{おも}出^{いで}を語る前に順序として私自身の事を少しくいわねばならない。

これより先き二葉亭の噂^{うわさ}は巖^{いわ}本^{もと}撫^ふ象^{しょう}から度々聞いていた。巖本は頻^{しき}りに二葉亭の人物を讃歎して、「二葉亭は哲学者である、シカモ輪廓の大なる人物である、」と激称していた。『浮雲』は私の当時の愛読書の一つで、『あいびき』や『めぐりあい』をも感嘆して何度も反覆していたから是非一度は面会したいと思いつながらにも機会を得なかった。

その頃私が往来していた文壇の人はいくばくもなかった。紅葉美妙以下硯友社諸氏の文品才藻には深く推服していたが、元来私の志していたのは経済であつて、文学の如きは閑余の遊戯としか思つていなかった。平たういと、当時は硯友社中は勿論、文学革新を呼号した『小説神髓』の著者といえども今日のように芸術を深く考えていなかった。ましてや私の如きただの応援隊、文壇のドウスル連^{れん}というようなものは最高文学に対する理解があるはずがなかった。面白づくに三馬や京伝や其磧^{きせき}や西鶴^{さいかく}を偉人のように持上げて、

内心ではこの輩が堂々たる国学または儒林の先賢と肩を列べる資格があるとは少しも思っていないかった。渠らの人物がどうのこうのというよりはドダイ小説や戯曲を尊重する気がしなかった。坪内逍遙や高田半峰の文学論を読んでも、議論としては感服するが小説その物を重く見る気にはなれなかった。

私が初めて甚深の感動を与えられ、小説に対して敬虔な信念を持つようになったのはドストエフスキーの『罪と罰』であった。この『罪と罰』を読んだのは明治二十二年の夏、富士の裾野の或る旅宿に逗留していた時、行李に携えたこの一冊を再三再四反覆して初めて露西亞小説の偉大なるを驚嘆した。

私は詞藻の才が乏しかったから、初めから文人になれようともまたなろうとも思わなかった。が、小説雑著は児供の時から好きでかなり広く渉獵していた。その頃は普通の貸本屋本は大抵読尽して聖堂図書館の八文字屋本を専ら漁っていた。西洋の物も少しは読んでいた。それ故、文章を作らしたらカラ駄目で、とても硯友社の読者の靴の紐を結ぶにも足りなかったが、其頃以後の小説を一通り漁り尽した私は硯友社諸君の器用な文才には敬服しても造詣の底は見え透いた気がして円朝の人情噺以上に動かされなかった。古人の作や一知半解ながらも多少窺った外国小説（その頃ゾラやドウデも既に読んでいた）でも

全幅を傾倒するほどの感に打たれるものには余り多く出会わなかったから、私の文学に対するその頃の直踏^{ねづみ}は余り高くはなかった。

然るに『罪と罰』を読んだ時、あたかも曠野^{こうや}に落雷に会うて眼眩^{くら}めき耳聾^しいたる如き、今までにかつて覚えないう甚深の感動を与えられた。こういう厳肅な敬虔な感動はただ芸術だけでは決して与えられるものでないから、作者の包蔵する信念が直ちに私の肺腑の琴線を衝いたのであると信じて作者の偉大なる力を深く感得した。その時の私の心持は『罪と罰』を措いて直ちにドストエフスキーの偉大なる霊と相抱擁するような感に充^みたされた。

それ以来、私の小説に対する考は全く一変してしまった。それまでは文学を軽視し、内心「時間潰^{キルタイム}し」に過ぎない遊戯と思ひながら面白半分の応援隊となっていたが、それ以来かくの如き態度は厳肅な文学に対する冒^{ぼう}流^{りゅう}であると思ひ、同時に私のような貧しい思想と稀薄^{きはく}な信念のものが遊戯的に文学を語るを空恐ろしく思った。

同時に私は二葉亭を憶出した。巖本撫象が二葉亭は哲学者であるといったのを奇異な感じを以て聞いていたが、ドストエフスキーの如き偉大な作家を産んだ露国の文学に造詣する二葉亭は如何なる人であろうと揣摩^{しま}せずにはいられなかった。

これより先き、私はステツプニヤツクの『アンダーグラウンド・ラシヤ』を読んで露国

の民族性及び思想に興味を持ち、この富士の裾野に旅した時も行李の中へ携えて来たが、『罪与罰』に感激すると同時にステップニヤックを想い起し、かつ二葉亭をも憶い浮べた。今考えると、ステップニヤックと二葉亭とを結び付けるといふは奇妙であるが、その時は同型でなくとも何処かに遠い親類ぐらいの共通点があるように思っていた。ステップニヤックの肖像や伝記はその時分まだ知らなかったが、精悍剛愎の氣象が満身に張切つてゐる人物らしく推斷して、二葉亭をもまた巖本からしばしば「哲學者である」と聞いていた故、哲學者風の重厚沈毅に加えて革命黨風の精悍剛愎が眉宇に溢れている状態らしいと考えていた。左に右多く多くの二葉亭を知る人が会わない先きに風采閑雅な才子風の小説家型であると想像していたと反して、私は初めから爾うは思っていなかった。

秋の末に歸京すると、留守中の來訪者の名刺の中に意外にも長谷川辰之助の名を発見してあたかも酸を懷うて梅実を見る如くに歓喜し、その翌々日の夕方初めて二葉亭を猿樂町に訪問した。

丁度日が暮れて間もなくであつた。座敷の縁側を通り過ぎて陰氣な重苦しい土蔵の中に案内されると、あたかも方領無髯の巨漢が高い卓子の上から薄暗いランプを移して、今まで腰を掛けていたらしい黒塗の箱の上の蒲団を跳退けて代りに置く処だった。

一応初対面の挨拶^{あいさつ}を済まして部屋の四周を見廻した。薄暗いランプの蔭に隠れて判^{はつき}然^り解^{わか}らなかったが、ランプを置いた小汚ない本箱の外には装飾らしい装飾は一つもなく、粗末な卓子に附属する椅子さえなくして、本箱らしい黒塗の剥^はげた頃^{ころ}合^{あい}の高さの箱が腰掛ともなりランプ台ともなるらしかった。美妙齋や紅葉の書齋のゴタクサ書籍を積重ねた中に変^{へんてこ}挺^こな画や翫^{おもちゃ}弄^な物を列^{なら}べたと反して、余りに簡単過ぎていた。

風采は私の想像と余りに違^{ちが}わなかった。沈毅な容貌に釣^{さび}合う錆のある声で、極めて重々しく一語々々を腹の底から擀^{しぼ}り出すように話した。口の先きで喋^{しゃ}べる我々はその底^{そこ}力^{ちから}のある音声を聞くと、自分の饒^{じょう}舌^{ぜつ}が如何にも薄ッぺらで目方がないのを恥かしく思っ
た。

何を咄^{はな}したか忘れてしまったが、今でも頭脳に固く印しているのは、その時卓子の上に読^{よみ}半^きしの書籍が開いたまま置かれてあつたのを何であると思^{おも}はれて面^{おも}差^はげな顔をして、「誠にお恥かしい事で、今時^{いまじ}分^{ぶん}漸^{やう}と『種^{オリジン・オブ・スペシース} 原 論』を読^よんでるような始末で、あなた方^{がた}英書をお読^よみになる方^{かた}はこういう名著を早くから御覧になる事が出来るが、露西亞には文学書の外何にもないので三歳^{みつご}子も知^しってる名著に今時^{いまじ}分^{ぶん}漸^{やう}とこさと囁^{ささ}り付^かいているような次第で、」とさも恥入するという容子だった。それから三十年経^かつ

た今でさえ尚だダアウインを覗^{のぞ}かない私は今でも憶出すと面目ないが、なお更その時は消え入りたいような氣持がした。

その時私より三、四十分も遅れて大学の古典漢文科の出身だというYが来問した。この人の口から日本将来の文章という問題が提起された。その時の二葉亭の答が、今では發揮^{はき}と覺えていないが、何でもこういう意味であつた。「一体文章の目的は何である乎^か。真理を發揮するのが文章の目的乎、人生を説明するのが文章の目的乎、この問題が決しない中^{うち}は将来の文章を論ずる事は出来ない。この問題が定まれば乃^{すなわ}ちその目的を達するに最も近い最も適する文章が自^{おの}ずから将来の文体となるのである——」という趣旨であつた。

この答には私は意外の感に打たれた。当時私はスペンサーの文体論を初め二、三の著名な文章説を読んでいたが、こういう意味の文章論をいわゆる小説家の口から聴こうとは夢にも思つていなかった。問題の提出者たる古典科出身のYは不可解な顔をして何ともいわなかつた。

ドストエフスキーを読んで落雷に出会つたような心地のした私は更に二葉亭に接して千丈^{ひばく}の飛瀑に打たれたような感があつた。それまで実は小説その他のいわゆる軟文学をただの一時の遊戲に過ぎないとばかり思つていたのだが、臃^{おぼ}ろ氣^げながらも人生と交渉する嚴肅

な森厳な意味を文学に認めるようになったのはこの初対面に由て得た二葉亭の賜物であつて、誰に会つた時よりも二葉亭との初対面が最も深い印象を残した。

二 津の守の女の写真屋

たしか明治二十四年頃であつた、二葉亭は四谷の津の守の女の写真屋の二階に下宿した事があつた。写真屋という気が利いているが、宿場外れの商人宿めいたガサガサした下等な家で、二葉亭の外にも下宿人があつたらしく、写真屋が本業であつた乎、下宿屋が本業であつた乎、どちらとも解らない家であつた。

秋の一夜偶然尋ねると、珍らしく微醺を帯びた上機嫌であつて、どういふ話のキツカケからであつたか平生の話題とは全く見当違いの写真屋論をした。写真屋の資本の要らない話、資本も労力も余り要らない割合には楽に儲けられる話、技術が極めて簡単だから女にでも、少し器用なら容易に覚えられる話、写真屋も商売となると技術よりは客扱いが肝腎だから、女の方がかえつて愛嬌があつて客受けがイイという話、ここの写真屋の女主人というは後家さんだそうだが相応に儲かるという咄、そんな話を重ねた挙句が、

「官吏も面白くないから、女の写真屋でも初めて後見をやるうかと思う、」と取つても附かない事を言出した。

「女の写真屋は面白い。が、あるかネ、技師になる適當の女が？」というと、さもこそといわぬばかりに、「ある、ある、打つて付けのお誂え向きという女がある。技術はこれから教育まにやならんが、技術は何でもない。それよりは客扱い——髻の生えた七難かしい軍人でも、訳の解らない田舎の婆さんでも、一視同仁に手の中に丸め込む客扱いと、商売上の繰廻しをグングン押切つて奮闘する勝氣が必要なんだが、幸い人生の荒波の底を潜つて活きた學問をして来た女がある」と、それから今の女の教育が何の役にも立たない事、今の女の學問が紅白粉のお化粧同様である事、眞の人間を作るには學問教育よりは人生の實際の塩辛い經驗が大切である事、茶屋女とか芸者とかいうような下層に沈淪した女が案外な道德的感情に富んでいて、率という場合懷る育ちのお嬢さんや女学生上りの奥さんよりも遙に役に立つ事を諄々と説き、「女丈夫というほどでなくとも、こういう人生の荒浪を潜り抜けて来た女でなくては男の眞の片腕とするには足りない」と、何処の女であるか知らぬが近頃際会したという或る女の身の上咄をして、「境涯が境涯だから人にも賤しめられ侮られているが、世間を呑込んで少しも疑懼しない氣象と、人情の機

微に通ずる貴い同情と——女学校の教育では決して得られないものを持つてゐる。こういう女に多少の学問と独立出来る職業を与えたら、虚栄に憧^{あこ}がれる今の女学校出の奥さんよりは遙^{まよ}に勝つた立派な女が出来る、」と意気込んで咄した。

この結論に達するまでの理路は極めて井然^{せいぜん}としていたが、ツマリ泥水稼^{どろみずかぎ}業^{ぎょう}のものが素人^{しらうと}よりは勝つてゐるというが結論であるから、女の看方^{みかた}について根本の立場を異にする私には一々承服する事が出来なかつた。が、議論はともあれ、初めは微醉^{ほろよいぎ}気味であつたのが段々真剣になつて低い沈んだ調子でポツリポツリと話すのが淋しい秋の寂寞^{せきばく}に浸^しみ入るような気がして、内心承服出来ない言葉の一つ一つをシンミリと味^{あじ}わ^わせられた。

「その女をどうしようツてのだい？」

「どうする意^{つもり}もないが、境遇のため眠つてゐるヒューマニチーの眼を覚まさせるため、真面目^{まじめ}な職業なり学問なりを与えてやりたいのだ」と、女の咄から発して人生論となり、コントのポジティブイズムに説き及ぼし、蜘蛛^{くも}が巣を作るように段々と大きな網を広げて、終^{つい}にはヒューマニチーの大哲学となつた。女の写真屋を初めるといふのも、一人の女に職業を与えるためというよりは、救世の大本願を抱く大聖が辻説法の道場を建てると同じような重大な意味があつた。

が、その女は何者である乎、現在何処にいる乎と、切込んで質問すると、「唯ほんの通り一遍の知り合いだからマダ発表する時期にならない、」とばかりで明言しなかった。が、「一見して氣象に惚ほれ込んだ、共に人生を語るに足ると信じたのだ、」と深く思込んだけ色しきだった。

折々——というよりは煩うるさく、多分下宿屋の女中であつたろう、十二階下とでもいいような真ま白っしろに塗り立てた女が現われて来て、茶を汲くんだり炭をついだりしながら媚なまめかしい容よう子すをして、何か調かつ戯かわれて見たそうにモジモジしていた。沈毅な二葉亭の重々しい音聲と、こうした真剣な話に伴うシンミリした気分とに極めて不調和な下げ司すな女の軽うい上わ調うち子こが虫唾むしずが走るほど堪たまらなく不愉快だった。

十二時近くこの白粉の女が来て、「最もう臥ふせりますからお床とこを伸べましようか、」といった。遅いとは思つたが、初めて時間に気が付いて急いで座を起たとうとすると、尚まだ余談が尽きないから泊はなつて行けといいつつ、「お客様の床も持つて来てくれ」と吩咐いいつけた。

二葉亭は談話はなしが上じよう手ずでもあつたしかつ好きでもあつた。が、この晩ぐらい興奮した事は珍ふらしかった。更ふければ更けるほど益々身が入って、今ではその咄の大部分を忘れてしまったが、平日の冷やかな科学的批判とは全く違つたシンミリした人情の機微に入つた話

をした。二時となり三時となつても話は綿々として尽きないで、余り遅くなるからと臥床ねどこに横になって、蒲団の中に潜もぐずり込んでしまつてもなおこのまま眠ねてしまうのが惜しうであつた。「寝よう乎」と寝返りしては復またた暫らくして、「どうも寝られない」と向き直つてポツリポツリと話し出し、とうとう鶏とりの音ねが聞えて雨戸あまどの隙すきが白んで来たまでも語り続けた。明るくなつたので最もう眠ねるでもないと床を離れて「それじゃア帰ろう」というと、まだ話が仕足りなさそうな容子で、「どうせ最もう眠ねられんから運動がてら其辺そこらまで送つて行こう」とムツクリ起上つて、そこそこに顔を洗つてから一緒に家を出で、津の守から坂町を下り、士官学校の前を市谷いちがや見附みつけまで、シラシラ明けのマダ大抵な家の雨戸が下りてる中をブラブラと送つて来た。八幡の鳥居とぎやの傍そばまで来て別れようとした時、何と思つた乎、「イヤ、昨宵ゆうべは馬鹿ばかツ話をした、女の写真屋の話は最もう取消した、」とニヤリと笑いつつ、「飛んでもないお饒舌しゃべりをしてしまった!」

*

その晩の話を綜合して想像すると、境遇のため泥水稼業に墮おちた可哀相な氣の毒な女が

あつて、これを泥の中から拾い上げて、中年からでも一人前になれる自活の道を与える意で、色々考えた結果がココの女の写真屋の内弟子に住込ませて仕込んでもらつてゐた。が、んな女が果してあつたかドウかは知らない。この晩度々見えた白粉の女がそうらしくも思われたが、マサカに二葉亭が「一見して氣象に惚れ込んだ」というほど思い込んだ女があんな下司な引摺だとは信じられなかった。女の写真屋の話はそれ切で、その後コツチから水を向けても「アレは空談サ」とばかり一笑に附してしまつたから今以て不可解である。二葉亭は多情多恨で交友間に聞え、かなり艶聞にも富んでいたらしいが、私は二葉亭に限らず誰とでも酒と女の話には余り立入らんから、この方面における二葉亭の消息については余り多く知らない。ただこの一夜を語り徹かした時の二葉亭の緊張した相貌や言語だけが今だに耳目の底に残つてゐる。

三 食道楽と無頓着

二葉亭には道楽というものがなかった。が、もし強て求めたなら食道楽であつたろう。無論食通ではなかったが、始終かなり厳ましい贅沢をいつていた。かつ頗る健啖家で

あつた。

私が猿樂町に下宿していた頃は、直ぐ近所だったので互に頻^{ひんぱん}に往来し、二葉亭はいつでも夕方から来ては十二時近くまで咄^{はな}した。その頃私は毎晩夜更^{よふ}かしをして二時三時まで仕事をするので十二時近くなると釜^{かま}揚げ^{あげ}うどん^{どん}を取るのが例となっていた。下宿屋の女中を呼んで、願^{あこ}をしやくツて「宜^いいかい」というと直ぐに合点したもんだ。二葉亭も来る度^{たび}に必ずこの常例の釜揚げを賞翫したが、一つでは足りないで二つまでペロリと平らげる事が度々^{たびたび}であつた。

二葉亭の恩師古川常一郎も交友間に聞えた食道楽であつた。かつて或る暴風雨の日に俄^{にわか}に鰻^{うなぎ}が喰^くいたくなつて、その頃名代の金杉^{かなすぎ}の松金^{まつきん}へ風雨を犯して綱曳^{つなひ}き跡^{あと}押^お付^しきの俤^{くるまかけつ}で駆付けた。ところが生憎^{あいにく}不漁^{しけ}で休みの札が掛けていたので、「折角暴風雨^{あらし}の中を遙^はるばる々々車を飛ばして来たのに残念だ」と、悄気^{しよげ}返^{かえ}つて頻^{しきり}に愚痴^うつたので、帳場の主人が気の毒がつて、「暫らくお待ち下さいまし」と奥へ相談に行き、「折角ですから一尾^{いっぴき}で宜^{よろ}しければ……」といった。「一尾結構、」と古川先生大いに満足して一尾の鰻^{うま}を十倍旨^{うま}く舌打して賞翫したという逸事がある。恩師の食道楽に感化された乎、将^はた天稟^{てんびん}の食癖であつた乎、二葉亭は食通ではなかったが食物^{くいのもの}の穿議^{せんぎ}がかなり厳^{やか}ましかつた。或る時一

緒に散策して某々知人を番町に尋ねた帰るさに靖国神社近くで夕景となったから、何処かで夕飯を喰おうという、この近辺には喰うような家がないといって容易に承知しない。

それから馬場を通り抜け、九段を下りて神保町じんぼうちょうをブラブラし、時刻は最う八時を過ぎ、腹の虫がグウグウ鳴って来たが、なかなかその牛肉屋へ入ろうといわない。とうとう明神下の神田川かんだがわまで草臥くたびれ足を引摺って来たのが九時過ぎで、二階へ通って例の通りに待たされるのが常より一層待遠しかったが「こうして腹を空すかせて置くのが美食法の秘訣だ、」と、やがて持つて来た大串おおぐしの脂あぶらツこい奴をペロペロと五皿いっさ平らげた。

私は食物くいものには割合に無頓着むとんちやくであつて、何処でも腹が空けばその近所の飲食店で間に合あわして置く方であるが、二葉亭はなかなか爾そう行かなかつた。いつでも散歩すると意見の衝突きつとを来きたすは必ず食事であつて、その度毎たんびに「食物くいものでは話せない」といった。電車の便利べんりのない時分、向島むこうしまへ遊びに行つて、夕飯を喰いにわざわざ日本橋まで俵はつを飛ばして行くという難むずかし屋であつた。

その上に頗る多食家であつて、親しい遠慮のない友達が来ると水菓子だの餅菓子だのと三種みいろも四種よいろも山盛りに積んだのを列べて、お客はそちのけで片端からムシャムシャと間ま断つぎなしに頬張ほおばりながら話をした。殊に蜜柑みかんと樽柿たるがきが好物で、見る間に皮や種子を山の

ように積上げ、「死骸を見るとさも沢山喰つたらしくて体裁が宜くない、」などと云い云い普通の人が一つ二つを喰う間に五つも六つもペロペロと平らげた。

が、贅沢は食物だけであつて、衣服や道具には極めて無頓着であつた。私が初めて訪問した時にダーウインの『種原論』が載っていた粗末な卓子テーブルがその後脚を切られて、普通の机となつて露西亞へ行くまで使用されていた。硯も書生時代から持古るしたお粗末のものなら、墨も筆も少しも扱ばなかつた。机の上は勿論、床の間にさえ原稿紙や手紙殻がらや雑誌や書籍がダラシなくゴタクサ積重ねられ、装飾らしい装飾は一物もなかつた。一口にいうと、地方からポツと出の山出し書生いなかの下宿住い同様であつて、原稿紙からインキの色までを気にする文人らしい趣味や気分を少しも持たなかつた。文房粧飾というようなそんな問題には極めて無頓着であつて、或る時そんな咄が出た時、「百万両も儲かつたら眼の玉の飛出るような立派な書斎を作るサ、」と事もなげに呵々からからと笑つた。

衣服にもやはり無頓着であつた。煙草たばこが好きで、いつでも煙管きせるの羅宇らおの破れたのに紙を巻いてジウジウ吸っていたが、いよいよ胭脂やにが溜たまつて吸口すいくちまで滲み出して来ると、締めるメレンスの帯を引裂いて掃除するのが癖で、段々引裂かれて半分近くまでも斜はすに削けずり掛かけのように総ふさが下つてゐる帯を平気で締めていた。実業熱が長じて待合入りを初めてから

俄かにめかし出したが、或る時羽織を新調したから見てくれと斜子の紋付を出して見せた。かなり目方のある斜子であつたが、絵甲斐機えがいきの胴裏どううらが如何にも貧弱で見窄みすぼらしかつたので、「この胴裏じゃ表が泣く、最少もすこし気張れば宜よかつた」というと「何故なぜ、昔から羽織の裏は甲斐機に定きまつてゐるじゃないか、」と澄ました顔をしていた。それから、「この頃は二ふ子の裏にさえ甲斐機を付ける。斜子の羽織の胴裏が絵甲斐機じゃア郡役所の書記か小学校の先生染じみていて、待合入りをする旦那だんなの估券こけんに触さわる。思切つて緞子どんすか繻珍しゅちんに換え給え、」(その頃羽二重はぶたえはマダ流行はやらなかつた。)という、と、「緞子か繻珍?——そりやア華族様の事ことツた、」と頗る不平な顔をして取合あわなかつた。丁度同じ頃、その頃流行はやつた黒無地のセルに三紋みつもんを平縫ひらぬいにした単羽織ひとえばおりを能く着ていたので、「大分渋いものを拵こしらへたネ、」と褒めると、「この位なものは知つてゐるサ、」と頗る得々としていた。

四 俗曲趣味

二葉亭は江戸ツ子肌であつた。あの厳いかめしい顔に似合あわず、(野暮やぼを任じていたが、)粹いきとか渋いとかいう好みにも興味を持つていて相應に遊蕩ゆうとうもした。そういう方面の交際を

全く嫌った私の生野暮を晒^{さら}つて、「遊蕩も少しはして見ないとホントウの人生が解らんものだ、一つ何処^{どこ}かイイ処へ案内しようじゃないか、」と能く云^{よく}い云^いいた。

二葉亭のお父さんは尾州藩だったが、長い間の江戸詰^{づめ}で江戸の御家人^{ごけにん}化していた。お母さんも同じ藩の武家生れだったが、やはり江戸で育つて江戸風に仕込まれた。両親共に三味線が好きで、殊^{こと}にお母さんは常磐津^{ときわづ}が上手で、若い時には晩酌^{ばんしやく}の微醉^{ほろえい}にお母さんの絃^{いと}でお父さんが一とくさり語るといような家庭だったそうだ（二葉亭の直話）。江戸の御家人にはこういう芸欲や道楽があつて、大抵な無器用なものでも清^{きよ}二元や常磐津の一とくさり位は唄^{うた}ったもんだ。二葉亭のお父さんも晩酌^{ばんしやく}の膳^{ぜん}に端唄^{はうた}の一つも唄^{うた}うという嗜^{たしな}みがあつたのだから、若い時分には相応にこの方面の苦勞をしたらうと思う。この享樂氣分の血は二葉亭にもまた流れていた。

その頃の書生は今の青年がオペラやキネマへ入^{いり}浸^びると同様に盛んに寄席^{よせ}へ通^{かよ}つたもので、寄席芸人の物真似^{ものまね}は書生の課外レソンの一つであつた。二葉亭もまた無二の寄席党で、語学校の寄宿舎にいた頃は神保町の川竹（その頃は川竹とはいわなかったが）の常連であつた。新内^{しんない}の若辰^{わかたつ}が大の蟲負^{ひいき}で、若辰の出る席へは千里を遠しとせず通い、寄宿舎の淋^{しみ}しい徒然^{つれづれ}には鍔^{さび}のある声で若辰の節^{ふし}を転^{ころ}がして喝^{かつ}采^{さい}を買^かつたもんだそうだ。二葉亭

の若辰の身振みぶり声色こわいろと矢崎嵯峨の屋の談志の物真似テケレッツのペアは寄宿舎の評判であった。嵯峨の屋は今は六十何歳の老年でマダ健在であるが、あのムツツリした朴々ぼくぼくたる君子がテケレッツのペアでステコ氣分を盛んに寄宿舎に溢あふらしたもんだ。語学校の教授時代、学生を引率して修学旅行をした旅店の或る一夜、監督の各教師が学生に強要されて隠し芸を迫られた時、二葉亭は手拭てぬぐいを姉さん被かぶりにして箒ほうきを抱かかえ、俯向うつむき加減に白い眼を剥むきつつ、「処ところ、青山百人町の、鈴木主水もんどというお侍さむらいさんは……」と替女ごぜの坊ぼうの身振みぶりをして、平生小六ひじろこむすかしい顔をしている先生の意外な珍芸にアツと感服さしたというのはやはり昔し取った杵柄きねづかの若辰の物真似であつたろう。「謹厳」が洋服を着たような満面苦渋の長谷川辰之助先生がこういう意表な隠し芸を持っていようとは学生の誰もが想像しなかつたから呆氣あつけに取られたのも無理はない。が、「謹嚴」のお化ばけのような先生は尾州人という条、江戸の藩邸で江戸の御家人化した父の子と生れた江戸ツ子であつたのだ。

東片町に住すまつた頃、近所に常磐津を上手に語る家があつた。二葉亭は毎晩その刻限を規ねらつては垣根越しに聞きに行つた。艶ッつやぽい節廻ふしまわしの身に沁しみ入るようなのに聞惚ききほれて、ためなが為永ちゆうほんの中本あだに出て来あだそうちゆうどしまな仇な中年増うわさを想像しては能く噂うわさをしていたが、或る時尋ねると、「時にアノ常磐津の本尊をとうとう突留めたところが、アンマリ見当外はすれでビ

ツクリした。仇な年増どころか皺しわだらけのイイ婆アさんサ。あの乾枯ひからびたシャモの頸くびのような咽喉のどからドウしてアンナ艶ツぽい声が出るか、声ばかり聞いていると身体からだが融とけるようだが、顔を見るとウンザリする、」といった。が、顔を見るとウンザリしてもその声に陶醉した気持は忘れられないと見えて、その後も時々垣根の外へ聞きに行ったらしかった。

『平凡』の一節に「新内でも清元でも上手の歌うのを聞いていると、何だかこう国民の精粹というようなものが髻ほうふつ髻としてイキな声や微妙の節廻しの上に現れて、わが心の底に潜む何かに触れて何かが想い出されて何ともいえぬ懐なつかしい心持になる。私はこれを日本国民が二千年来この生を味あじうて得た所のものが間接の思想の形式に由らず直ちに人の肉声に乗って無形のままで人心に來り迫るのだ」とあるは二葉亭のこの間の芸に魅入られた心境を説明しておる。だが、こういうと馬鹿に難かしく面倒臭くなるが、畢竟は二葉亭の頭の隅のドコかに江戸ツ子特有の廃はい類たい気分が潜在して、同じデカダンの産物であるこういう俗曲に共鳴したのであろう。これを日本国民が二千年来この生を味うて得た所のものと国民性に結びつけて難かしく理窟をつける処に二葉亭の国士的形氣かたぎが見える。

だが、同じ日本の俗曲でも、河東節かとうぶしの会へ一緒に聴きに行った事があるが、河東節には閉口したらしく、なるほど親類だけに二段聴きだ、アンナものは三味線の揺籃ようらん時代のは

産物だといって根っから感服しなかった。河東節の批評はほぼ同感であつたが、私が日本の俗曲では何といつても長唄ながうたであるとか長唄礼讃を主張すると、長唄は奥さん向きの家庭音曲であると排斥して、何といつても隅田河原すみだがわらの霞かすみを罩こめた春の夕暮はらわたしきというような日本民族独特の淡い哀愁を誘つて日本の民衆の腸に染込はらわたしきませるものは常磐津か新内の外にはないと反対した。この俗曲論は日本の民族性の理解を基礎として立てた説であるが、一つは両親が常磐津が好きで、児供こどもの時から聴き馴なれていたのと、最一つは下層階級に味方する持も前ちまえの平民的傾向から自然にこれらの平民的音曲に対する同感が深かつたのであろう。

二葉亭は洋楽には一向趣味がなかつた。折に触れて洋楽に対する私の興味を語ると、「洋楽はトツピキピのピだ」と一言に蔑けなしつけた。「洋楽にもかなりシンミリしたものである、ヘイズンかシューベルトのセレナードでも聴いて見給え、かなりシンミリした情調が味える、かつシンミリしたものばかりが美しい音楽ではないから……」と二、三度音楽会へ誘つて見たが、「洋楽は真平まっぴら御免だ！」といつて応じなかつた。桜井女学校の講師をしていた時分、卒業式に招かれて臨席したが、中途にピアノの弹奏が初まつたので不快になつて即時に退席したと日記に書いてある。晩年にはそれほど偏意かたいし地ではなかつたが、左とに右かく洋楽は嫌いであつた。この頃の洋楽流行時代に居合あわして、いわゆる鋸のこぎりの目を立

てるようなヴァイオリンやシャモの絞しめころ殺されるようなコロラチウラ・ソプラノでもそこから聴かされ、加之おまけにラジオで放送までされたら二葉亭はとても助かるまい。苦にがむ虫潰しつぶしても居堪いたたまらないだろう。

五 犬と猫

俗曲よりも好きだったのは犬と猫であつた。俗曲と家畜を一緒にするのは変であるが二葉亭の趣味問題としていうと、俗曲の方には好き嫌いや註文があつて、誰が何を語つても感服したのではなかつたが、家畜の方は少しも折りえ好みがなく、どんな犬でも猫でも平等に愛していた。『浮雲』時代の日記に、「常に馴れたる近隣の飼犬のこの頃は余を見ても尾を振りもせず跟あとをも追はず、その傍を打通れば鼻つらをさしのべて臭かひを嗅ぐのみにて余所よそを向く、この頃はさかなを食する事稀まれなれば残りを食はまする事もしばしばあらざればと心の中に思ひたり、ただこう思ひたるばかりにてさして心に留めざりしかど何となく快からず」とあるは犬に与える残ざんこうにだも不自由をして懐なついた犬に背そむかれたのを心淋しく感じたのであろう。

『平凡』の中の犬の一節は二葉亭の作中屈指の評判物であるが、あれは仲猿樂町時代の飼犬の実話を書いたものである。あの行衛ゆくゑ知れずになった犬というはポインターとブルテリアの醜い処を搗交つきまぜたような下等雜種であつて、『平凡』にある通りに誰の目にも余り見つとも好くよない厭いやな犬であつた。『平凡』では棄てられてクンクン鳴いていた犬の子を拾つて育て上げたように書いてあるが、事實は役所の帰途かえりみちに随ついて来た野良犬のらいぬをズルズルベツタリに飼犬としてしまつたので、『平凡』にある通りな狐のような厭な犬であつたから、家族は誰も嫌いやがつて碌々ろくろく関かまいつけなかつた。が、犬ぶりに由て愛憎を二つにしない二葉亭は不便ふびんがつて面倒を見てやつたから、犬の方でも懷たいて、二葉亭が出る度毎たんびに跟を追つて困るので、役所へ行く時は格子こうしの中に閉じ込めて何処へも出られないようにして置いた。その留守中は淋しそうにションボリして時々悲しい低い声を出して鳴いていたが、二葉亭が歸つて来て格子を開あけると嬉うれしそうに飛付き、框かまちに腰を掛けて靴を脱ぬごうとする膝ひざへ飛上つて、前脚を肩へ掛けてはベロベロと頬ほべたを舐なめた。「こらこら、そんな所まねをする勿な」と二葉亭は柔やさしく制しながらも平気で舐めさしていた。時に由ると、嬉しくて堪らぬように踵あとから泥足どろあしのまま座敷まで追掛けて来てジャレ付いた。ジャレ付くのが可愛あいいような犬ではなかつたが、二葉亭はホクホクしながら、「こらこら、畳の上が泥にな

る、」と細い眼をして叱りつけ、庭先きへ追出しては麵麴を投げてやった。これが一日の中の何よりの楽しみであつた。『平凡』に「……ポチが私に對うと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか?……どっちだかそれは解らんが、とにかく相互の熱情熱愛に人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる、」とあるはこの瞬間の心持をいったもんだ。

この犬が或る日、二葉亭が出動した留守中、お客が来て格子を排けた途端に飛出し、何処へか逃げてしまつてそれ切り歸らなかつた。丁度一週間ほど訪いも訪われもしないで或る夕方偶と尋ねると、いつでも定つて飛付く犬がいないので、どうした犬はと訊くと、潮垂れ返つた元氣のない声で、「逃げたのか、取られたのか、いなくなつてしまつた」と、見えなくなつた顛末を語つて吻と嘆息を吐いた。「まるきり踪跡が解らんのかい?」と重ねて訊くと、それ以来毎日役所から歸ると処々方々を捜しに歩くが皆目解らない、「多分最う殺されてしまつたろう」と悄れ返つていた。「昨日は酒屋の御用が来て、こちらさまのに善く似た犬の首玉に児供が縄を縛り付けて引摺つて行くのを壱岐殿坂で見掛けたといったから、直ぐ飛んでつて其処ら中を訊いて見たが、皆くれ解らなかつた。児供に虐め殺された乎、犬殺しの手に掛つたか、どの道モウいないものと断念めにやならない」

と、自分の児供を喪くした時でもこれほど落胆すまいと思うほどに弱り込んでいた。家庭の不幸でもあるなら悔みの言葉のいいようもあるが、犬では何と言って慰めて宜いか見当が付かないので、「犬なんてものは何処かへ行つてしまったと思うと、飛んでもない時分に戻つて来るもんだ。今に必と歸つて来るよ、」といつて見た。が、二葉亭は「イヤ、最う断念めた!」と黙り込んでしまったので、この上最早言葉の接穂がなかった。

その当座は犬の事ばかりに屈托して、得意の人生論や下層研究も余り口に出なかった。

あたかも私の友人の家で純粹セッター種の仔が生れたので、或る時セッター種の深い長い艶々した天鵝絨よりも美しい毛並と、性質が伶俐で敏捷こく、勇氣に富みながら平生は沈着いて鷹揚である咄をして、一匹仔犬を世話しようかという、と、苦々しい顔をして、「イヤ、貰う気はしない、先妻が死んで日柄が経たない中に、どんな美人があるからツて後妻を貰う気になれるかい、」と喪くなった醜い犬を追懷して惻々の情に堪えないようだった。

犬よりも最う一倍酷愛していたのは猫であつた。皆川町時代から飯田町、東片町の家に入入したものは誰でも知つてゐる、白いムクムクと肥つた大きな牝猫が、いつでも二葉亭の膝の廻りを離れなかつたものだ。東片町時代には大分老耄して居睡ばかりしていたが、

この婆さん猫が時々二葉亭の膝へ這上つて甘垂れ声をして倦怠そうに戯れていた。人間なら好い齡をした梅干婆さんが十五、六の小娘の嬌態を作つて甘つ垂れるようなもんだから、小※らしくて撲り倒してやりたい処だが、猫だからそれほど妙にも見えないで、二葉亭はお祖父さんが孫を可愛がるようにホクホクして甘やかしていた。

この猫も本とは皆川町時代に何処からか紛れ込んで来た迷い猫であつて、毛並から面付までが余り宜くなかつた。が、二葉亭は、「誰も褒めてくれ手がなくても、大事な可愛い娘だ、」と、猫を抱えて頬摺りしながら能く言つたもんだ。「人間の標準から見ても猫の容貌が好い悪いのというは間違つてゐる、この猫だつて誰も褒めてくれ手がなくて猫同士が見たら案外な美人であるかも知れない、その証拠には交摯の時には牡猫が多勢張りに来る、」と。

かつ曰く、「仮に容貌が悪いにしても、容貌の好悪で好き嫌いをするのは真に愛する所以ではない。自分の娘が醜いからといって親の情愛に変わりが無いと同様に、猫にだつてやはり同じ人情がなければならぬはずだ。犬や猫の容貌が好い悪いのといつて好いたり嫌つたりするは人間として実に恥かしい事だ、」と。

二葉亭の家では主人の次には猫が大切にされた。主人の留守に猫に粗糲があつては大変

だといって、家中^{うちじゅう}がどれほど猫を荷^に厄^{やつ}介^{かい}にして心配したか知れない。出入^{でいり}の八百屋の女房が飛んで来て、「大變でござります、唯今こちらさまのお猫さんが横町の犬に追われて向うの路次^{ろじ}に逃込みました、」と目の色変えて註進に及んだという珍談もあつた。

さかな
をかうにも主人の次には猫の分を取つた。残^{あまり}を当てがうような事は決してなかつた。時々は「猫になりたい」という影^{かげ}口^{くち}もあつた。下世話^{げせわ}に、犬は貰われる時お子様方お幾たりと尋ねるが猫は孩児^{がき}は何匹だと訊^きくという通りに、猫は犬と違つて児供に弄^{いじ}られるのを煩^{うる}さがるものだが、二葉亭の家では猫は主人の寵^{ちよう}幸^{こう}であつて児供が翫^{おも}弄^{ちや}にするのを許さなかつた。児供の方でも父の秘藏を吞込んで、先年死んだ長男の玄太郎が五ツ六ツの悪戯^{いたずら}盛りにも「あれは父^{とう}ちゃんのおにゃん子」といつて指一本も決して触れなかつた。

この猫は主人の寵愛に馴れて頗る行儀が悪るかつた。客が来て食物^{くいもの}が出ると、必ず何処からかヌツと現われ、ノソノソ食物の傍^{そば}へ行つて臭^かいを嗅ぐ。世間の猫はコソコソ忍び足で近づいては、油断を見済まして引攪^{ひっさ}うものだが、二葉亭の猫は叱^しられた事がないから恐^{こわ}いという事を知らない。鷹揚にノソノソやつて来て、自分の好きな塩煎餅^{しおせんべい}か搔^{かき}餅^{もち}でもあろうもんなら、宛^さもこの家^やのものは竈^{かまど}の下^{した}の灰までが俺^{おれ}の物だというような顔

をして、平気で菓子鉢に顔を突込んでほりほりと喰べ初める。すると二葉亭は眼を細くして、「これこれ、復たそんな意地汚なをする」と静かに膝へ抱取つて掌上へ菓子を取つて喰わせながら、「放任教育だから行儀が悪くて困る、」と猫の頭を撫で撫で「が、本来猫に行儀を仕込むツてのが間違つてる、人間の道徳で猫を縛ろうとするのは人間の我儘で、猫に取つては迷惑千万な咄だ、」といった。けれどもお膳が出てから、生腥い臭いにいいよいよ鼻をムクムクさして、お客のお膳であろうと一向お関いなしに顔を突出し、傍若無人にお先きへ失敬しようとする時は、いくら放任教育でも有繋にお客の肴を掠奪するを打棄つて置けないから、そういう時は自分の膝元へ引寄せてお椀の蓋なり小皿なりに肴を取分けて陪食させた。が、この腕白猫めは頗る健啖家で、少とやそつのお裾分では満足しなかつた。刺身のひと皿位は独り占めにペロリと平らげてなお飽足らずに、首を伸ばして主人が箸に挿んで口まで持つて行こうとするのをやにわに横取りをする。すると二葉亭は眼を細くして、「ドウモ敏捷こい奴だ！」と莞爾々々しながら悦に入つたもんだ。

二葉亭の猫におけるや、丁度若い母親が初めて産んだ子を甘やかすように、始終懷ろに入れたり肩へ載せたり、夜は抱いて寝て、チョツカイでも出せば溶けるような顔をして頬

摺おずりしたり接吻せつぶんしたりした。猫めの方でも大甘垂れに甘垂れて舌を出してはベロベロと二葉亭の顔を舐なめた。「接吻だけは止よせというが、こうしずにはいられない」と状貌魁偉かいゐと形容しそうな相好そうこうを壊くずして、頤あごの下に猫を抱かかえ込んだでは小娘のように嬉しがって舐めたり撫さすったりした。

飯田町にいた時分、或る日曜日の朝十時頃に尋ねると、今起きたばかりだといって眠そうな顔をしていた。なんぼ日曜日でも少ちと寝坊が過ぎるというところ、「昨宵ゆうべは猫のお産で到底寝られなかった、」といった。段々訊くと、予てから猫の産月うみづきが近づいたので、書齋とだなの戸棚こうりに行李を準備よういし、小さい座蒲団を敷いて産所に充あてていたところ、昨夜ゆうべは宵よいから容子が変なので行李の産所へ入れるとは直ぐ飛出して息遣いきづかいも苦しうに※々《ニヤニヤ》啼なきながら頻りと身体からだをこすりつけて変な容子をする。爰ここで産落うみおとされては大変と、強むりに行李へ入れて押え付けつつ静かに背中から腰を撫さすってやると、快いい氣持きもちそうに漸やつと落付いて、暫らくしてから一匹産落し、とうとう弘あけがた曉あけがたまで掛かって九匹を取上げた、猫のお産の話を書細やかに説明して、「お産の取上とりあげ爺じいとなつたのは弁慶と僕だけだろう。が、卿きょうの君きみよりは猫の方がよっぽど豪えらかった、」と手柄てがら顔をした。それから以来習慣が付き、子を産たんむ度毎たびに必ず助産のお役を勤め、「犬猫の産科病院が出来ればさしずめ院長になれ

る経歴が出来た、」と大得意だった。

不思議な事にはこれほど大切に可愛がっていたが、この猫には名がなかった。家族うちのもの

は便宜上「白」と呼んでいたが、二葉亭は決して名を呼ばなかった。「名なんかドウでも好い、なくても好い、猫に名なんか付けるのは人間の繁はんぶん文ぶん緞じゆん礼れいで、猫は名を呼ばれたって決して喜ばない、」といていた。こんな処にも空名虚誉を喜ばない二葉亭の面目が現れていた。

最一つ不思議な事は、この位に猫や犬を可愛がっていても、ツイぞ一度人から貰った事がない。「棄てられたり紛まぐれたりして来たから拾って育ててやるので、犬や猫を飼うのは楽たのしみよりは苦くるみである。わざわざ求めて飼うもんじゃ決してない、」といていた。二葉亭の犬や猫に対するや人間の子を愛すると同じ心持であつた。

六 二葉亭の文章癖

二葉亭は始終文章を気にしていた。文人が文章に気を揉もむのは当然のようであるが、今日の偶像破壊時代の文人は過去の一切の文章型を無視して、同じ苦くるむにしてもこれまでの

文章論や美辞法からは全く離れて自由であるべきはずである。極端に言えば、思想さえ思う存分に発現する事が出来るなら方式や修辞は革命家の立場からはドウでも宜^よかるべきはずである。二葉亭も一つの文章論としては随分思切った放胆な議論をしていたが、率^いざ自分が筆を執る段となると仮名遣いから手^テ爾^ニ於^ヲ波、漢字の正^{せい}訛^か、熟語の撰択、若い文人が好い加減に創作した出鱈^{でたらめ}目の造語の詮^{せん}索^{さく}から句^く読^{とく}の末までを一々精究して際限なく氣にしていた。

二葉亭時代の人は大抵国漢文の秩序的教育を受けたから、国漢文の課題文章の習練にはかなり苦^{くる}まされて文学即文章の誤^くつた考を吹込まれていた。当時の文章教育というのは古文の摸倣であつて、山^{さん}陽^{よう}が項^{こう}羽^う本^{ほん}紀^ぎを数百遍反覆して一章一句を尽^{ことごと}く暗記したというような教訓が根深く頭に染^{しみこ}込んでいて、この根深い因襲を根本から剿^{そう}絶^{ぜつ}する事が容易でなかつた。二葉亭も根が漢学育ちで魏叔子や壮悔堂を毎日繰返し、同じ心持で清少納言や鴨^かの^{もの}ち^のう^めい^い長^ち明^{めい}を読み、馬琴や京伝三馬の俗文学までも究^きめ、課題の文章を練習する意^いで近松や馬琴の真似をしたり、あるいは俗文を漢訳したり漢文を俗訳したりした癖が抜け切れな^いで、文章を氣にする文章家氣質がいつまでも失^うせなかつた。一面には従来の文章型を根本から破壊した革命家であつたが、同時に一面においてはまた極めて神祕的な新らしい雕^ち

虫ようちゆうの技術家であつた。

自分は小説家でないとか文人になれないとかいったには種々の複雑した意味があつたが、自ら文章の才がないと断念あきらめたのもまた有力なる理由の一つであつた。二葉亭の作を読んで文才を疑う者は恐らく決してなかうと思うが、二葉亭自身は常に自己の文才を危あやぶんで神経的に文章を気に病んでいた。文章上の理想が余り高過ぎたというよりも昔の文章家氣質が失せなかつたので、始終文章に屈托していた。ツルゲーネフを愛読したのも文章であつて、晩年余りに感服しなくなつてからもなお修辞上の精妙を嘖さくさく々々し、ドストエフスキーの『罪と罰』の如きは露国の最大文学であるを確認しつつもなお、ドストエフスキーの文章はカラ下手へたくそで全まるで成つていないといつてツルゲーネフの次位に置き、文学上の批判がともすれば文章の好悪に囚とらわれていた。例えば現時の文学に対しても、露伴を第一人者であると推しながらも、座右に置いたのは紅葉全集であつた。近松でも西鶴でも内的概念よりはヨリ多くデリケートな文章味を鑑賞して、この言葉の綾あやが面白いとかこの引掛けが巧みだとかいうような事を能く咄はなした。また紅葉の人生觀照や性格描写を凡近淺薄けなと貶しながらもその文章を古今に匹ひつちゆう儔ちゆうなき名文であると激賞して常に反覆細読していた。最も驚くべきは『新声』とか何々文壇とかいうような青年寄書雑誌をすらわざわざ購読し

て、中学を卒業したかそこらの無名の青年の文章まで一々批点を加えたり評語を施こしたりして細さに味わった。丁度植物学者が路傍の雑草にまで興味を持って精しく研究すると同一の態度であつた。

この点では私は全く反対であつた。私は自分が悪文家であるからでもあろうが、夙から文章を輕蔑する極端なる非文章論を主張し、かつて紅葉から文壇の野獸視されて、君の文章論は狼の遠吠だと罵られた事があるくらい、文章上のアナーキストであつたから、文章論では二葉亭とも度々衝突して、内心竊に二葉亭の古い文章家氣質を慊然と思つてゐた。が、自分のような鈍感者では到底味う事の出来ない文章上の微妙な説を聞いて大いに発明した事もしばしばあつたし、洗練推敲肉瘦せるまでも反覆塗竄何十遍するも決して飽きなかつた大苦辛を見て衷心嘆服せずにはいられた。歿後遺文を整理して偶然初度の原稿を検するに及んで、世間に発表した既成の製作と最始の書き卸しと文章の調子や匂いや味がまるで別人であるように違つてゐるのを発見し、二葉亭の五分も隙がない一字の増減をすら許さない完璧の文章は全く千鍛万鍊の結果に外ならないのを知つて、二葉亭の文章に対する苦辛感嘆をいよいよ益々深くした。

七 田端の月夜

三十六年、支那から帰朝すると間もなく脳貧血症を憂いて暫らく田端たばたに静養していた。病氣見舞を兼ねて久しぶりで尋ねると、思ったほどに衰やつれてもいなかった。半日を閑談して夜るの九時頃となった。暇いとま乞こいて帰ろうとすると、停車場ステーションまで送ろうといつて、たつた二、三丁であるが隈くまなく霽はれた月の晩をブラブラ同行した。

満月ではなかったが、一点の曇りもない冴さえた月夜で、丘の上から遠く望むと、見渡す果はてもなく一面に銀泥ぎんでいを刷はいたように白い光で包まれた得えもいわれない絶景であつた。丁度秋の中頃の寒くも暑くもない快こころよい晩で、余り景色が好いので二人は我知らず暫らく佇たちど立まつて四辺あたりを眺めていた。二葉亭ふたはなは忽たちまち底そこ力ちからのある声で「明月や……」と叫うなつて、較やや暫らく考えた後、「……跡が出ない。が、爰ここで名句が浮んで来るようでは文人の縁かぜんが切れない。絶句する処が頼もしいので、この塩梅あんばいではマダ実業家の脈がある、」と呵然かせんとして笑つた。

汽車の時間を計つて出たにかかわらず、月に浮かれて余りブラブラしていたので、停車場ステーションでベルが鳴つた。周章あわてて急坂かけおを駈下ころりて転がるように停車場に飛込みざま切符を

買った処へ、終列車が地響き打って突進して来た。ブリッジを渡る暇もないのでレールを踏越えて、漸やつとこさと乗込んでから顔を出すと、跡から追駈けて来た二葉亭は柵さくの外に立つて、例の鍔さびのある太い声で、「芭蕉ばしやうさまのお連れで危ない処だった」といった。その途端に列車は動き出し、窓からサヨナラを交換したが、狭い路を辿たどって帰る淋しい背うしろ影かげが月明りに霞かすんで見えた。二葉亭の健康の衰え初めたのはその頃からであった。

八 対島沖の大海戦の二日後

最も元気だったのは日露戦争中であつた。大阪朝日の待遇には余り平らかでなかったが、東京の編輯局には毎日あるいは隔日に出掛けて、海外電報や戦地の通信を瞬時も早く読むの楽しみたのしとしていた。

「砲声聞ゆ」という電報が朝の新聞に見え、いよいよ海戦が初まったとか、あるいはこれから初まるとかいう風説が世間を騒がした日の正午少し過ぎ、飄ひよっこり然ぜんやって来て、玄関から大きな声で、

「とうとうやったよ！」と叫どなつた。

「やったか？」と私も奥から飛んで出で、「結果は？」

「マダ十分解らんが、勝利は確實だ。五隻か六隻は沈めたるう。電報は来ているが、海軍省が伏せてるから号外を出せないんだ、」とさも大本营か海軍省の幕僚ばくりようでもあるような得意な顔をして、「昨夜はマンジリともしなかった。今朝も早くから飛出して今まで社に詰めていた。結局はマダ解らんが、電報が来る度毎に勝利の獲物が次第に殖えるから愉快で堪らん。社では小使給仕までが有頂天だ。号外が最う刷れてるんだが、海軍省が沈黙しているから出す事が出来んで焦り焦りしている。尤も今日は多分夕方までには発表するだろうと思うが、近所まで用達しに來たから内々密と洩らしに來た。」

と、いつも沈着おちついてる男が、跡から跡からと籠こみあげ上る嬉しさを包み切れないように満面を莞爾にこにこ々々さして、「何十年來の溜飲りゆういんが一時に下った。赤錆あかさびだらけの牡蠣殻かきがらだらけのボロ船が少しも恐ろしい事アないが、それでも逃がして浦塩ウラジオへ追い込めると士氣に關係する。これで先ず一段落が着いた。詳報は解らんが、何でもよつぽど旨く行つたらしい……」とちよつと考えて「事に由るとロスロスの奴、滅茶々々めちやめちやかも解らん。今日の電報が楽みだ。」

といいつつソクサして、「こうしちやおられん。これから復た社へ行く、」と茶も飲ま

ないで直ぐ飛出し、「大勝利だ、今度こそロスの息の根を留めた、下戸もシャンパンを祝うべしだね！」と周章^{あたふ}た格子を排^あけて、待たせて置いた車に飛乗りざま、「急げ、急げ！」こんな周章^{あわ}ただしい忙がしい面会は前後に二度となかった。「ロスの奴滅茶々々かも解らん」とあたかも軍令部長か参謀総長でもあるかのようなプライドが満面に漲^{みなぎ}っていた。恐らくこの歓喜を一人で味^{あじわ}つてられないで、周章^あてて飛んで来たのであろう。

九 二葉亭の破壊力

二葉亭に親近した或る男はいつた。「二葉亭は破壊者であつて、人の思想や信仰を滅茶々に破壊するが、破壊したばかりでこれに代るの何物をも与えてくれない」と。思想や信仰は自ら作るもので人から与えるべきものでないから、求めるものの方が間違つてゐるが、左^とに右^かく二葉亭は八門遁^{とんこう}甲^あというような何処^{どこ}から切込^{きりくず}んでも崩^{きんし}す事の出来ない論陣を張^{すこぶ}つて、時々奇兵を放つては対^{あいて}手を焦^じらしたり悩^{なや}ましたりする擒^{きんし}縦^{じよう}殺活自在の思弁に頗^{すこぶ}る長じていた。

勿論、演壇または青天井の下で山犬のように吠^{ほえた}立つて憲政擁護を叫ぶ熱弁^{もし}、若くは建^{たて}

板に水を流すようにあるいは油紙に火を点けたようにペラペラ喋り立てる達弁ではなかつたが、丁度甲州流の戦法のように隙間なく槍の穂尖を揃えてジリジリと平押しに押寄せるというような論鋒は頗る目鮮ましかつた。加うるに肺腑を突き皮肉に入るの氣鋒極めて鋭どく、一々の言葉に鉄槌のような力があつて、触るる処の何物をも粉碎せずには置かなかつた。二葉亭に接近してこの鋭どい万鈞の重さのある鉄槌に思想や信仰を粉碎されて、茫乎として行く処を喪つたものは決して一人や二人でなかつたろう。

それがしの小説家が俄に作才を鈍らして一時筆を絶つてしまったのも二葉亭の鉄槌を受けたためであつた。それがしの天才が思想の昏迷を来して一時あらぬ狂名を歌われたのもまた二葉亭の鉄槌に虐げられた結果であつた。二葉亭に親近するものの多くは鉄槌の洗礼を受けて、精神的に路頭に迷うの浮浪人たらざるを得なかつた。中には靈の飢餓を訴うるものがあつても、靈の空腹を充たすの糧を与えられないで、かえつて空腹を鉄槌の弄る物にされた。

二葉亭の窮理の鉄槌は啻に他人の思想や信仰を破壊するのみならず自分の思想や信仰や計画や目的までも間断なしに破壊していた。で、破壊しては新たに建直し、建直しては復た破壊し丁度児供が積木を翫ぶように一生を建てたり破したりするに終つた。

二葉亭は常にいった。フィロソフィーというは何処までも疑問を追究する論理であつて、もし最後の疑問を決定してしまつたならそれはドグマであつてフィロソフィーでなくなつてしまふと。また曰く、人生の興味は不可解である、この不可解に或る一定の解釈を与えて容易に安住するは「あきらめ」でなければイグノランスであると。かくの如くして二葉亭の鉄槌は輕便安直なドグマや「あきらめ」やイグノランスを破壊すべく常に揮ふるわれたのである。

十 二葉亭の風丰人品

誰やらが二葉亭を評して山本権兵衛ごんべゑを小説家にしたような男だといつた。海軍問題以来山本伯の相場は大分下落し、漸ようやく復活して頭を擡もちあ上げ掛けると、忽たちまち復た地震のためにピシャンコとなつてしまつたから、文壇の山本伯というは苔こけの下この二葉亭も余りありがたくないだろうが、風丰ふうぼうが何処どこか似通にかよつてゐる。山本権兵衛と見立てたのは必ずしも不適評ではない。

が、骨相学や人相術が真理なら、風丰の似通つてゐる二人は性格の上にもどこかに共通

点がありそうなもんだが、事實は性格が全く相反対していた。二葉亭にもし山本伯の性格の一割でもあつたら、アンナにヤキモキ悶^{もだ}えたり焦^{いら}々したりして神経衰弱などに罹^からなかつたろう。社会的にも最少^{もすこ}し成功したろう。が、氣の毒なる哉^{かな}二葉亭は山本伯とは全く正反對に余りに内氣^{シヤイ}であつた、余りに謙遜であつた、かつ余りに潔癖であつた。切^せめて山本伯の九^{きゅう}牛^{ぎゅう}一^{いち}毛^{もう}なりとも功名心があり、粘着力があり、利慾心があり、かつその上に今少し鉄面皮^{てつめんぴ}であつたなら、恐らく二葉亭は二葉亭四迷だけで一生を終らなかつたであらう。

が、方領粗髯の山本権兵衛然たる魁偉^{かいゐ}の状貌は文人を青瓢^{あおびょうたん}筆^{なまつち}の生^{なまつち}白^{しろ}けた柔弱^{にやけお}男^{とこ}のシノニムのように思う人たちをして意外の感あらしめた。二葉亭の歿後知人は皆申合^あわしたように二葉亭の風丰がいゆる小説家型でなかつた初対面の意外な印象を語つておる。その上に重厚沈毅な風丰に加えて、双眉の間に深い縦の皺^{しわ}を刻みつつ緊^{きつ}と結んだ口から考え考えポツリポツリと重苦しく語る応対^{おうたい}ぶりは一見信賴するに足る人物と思わせずには置かなかつた。かつ対談数刻に涉^{わた}つてもかつて倦^{けん}色^{しよく}を示した事がなく、如何なる人に対しても少しも城府^{じょうふ}を設け^{おの}ないで、己^{おの}れの赤心^{せきしん}を他人の腹中に置くというような話しぶりは益々^{ますます}人をして心服せしめずには置かなかつた。

二葉亭を何といつたら宜よろからう。小説家型というものを強あながち青瓢箪せいひょうたん的のヒヨロヒヨロ男と限らないでも二葉亭は小説家型ではなかった。文人風の洒しやだつ脱な風流け氣も通つうじん人氣取きどりの嫌味いやみな肌合はだあいもなかった。が、同時に政治家型の辺幅へんぷくや銜氣げんきや倨傲きよこうやニコポンは藥にしろくもなかった。君子とすると霸氣はきがあり過ぎた。豪傑とすると神經過敏であつた。實際家とするには理想が勝ち過ぎていた。道学先生とするには世間が解り過ぎていた。ツマリ二葉亭の風格は小説家とも政治家とも君子とも豪傑とも實際家とも道学先生とも何とも定められなかった。

社交的応酬は余り上手でなかったが、慇懃いんぎん謙遜な言葉に誠意あふが滔あふれて人を心服しんぷくさせた。弁舌は下手でも上手でもなかったが話術に長じていて、何でもない世間咄せけんばなしをも面白く味あじわわせた。殊に小説の梗概こうがいでも語らせると、多少の身振声みぶりこわいろ色を交えて人物を眼前めのみえに躍お出どりださせるほど頗る巧みを究めた。二葉亭が人を心服させたのは半ばこの巧妙なる座談の力があつた。

二葉亭は極めて謙遜であつた。が、同時に頗る負け嫌いであつた。遠慮のない親友同士の間では人が右といえれば必ず左というのが常癖で、結局同じ結論に達した場合「むむ、そうか、それなら同説だ、」といったもんだ。初めから同じ結論に達するのが解あつていても

故意に反対に立つ事が決して珍らしくなかった。かつこの反対の側から同じ結論に達する議論を組立てる手際が頗る鮮かであつた。

負け嫌いの甚だしいは、人に自分の腹を看透かされたと思うと一端決心した事でも直ぐ

撤去して少しも未練を残さなかつた。かつて二葉亭の一身上の或る重要な問題について坪内博士と談合した時、二葉亭の心の中は多分こうであらうと推断して博士に話した。すると間もなく二葉亭は博士を訪うて、果して私が憶測した通りな心持を打明けて相談したので、「内田君も今来て君の心持は多分そうであらうと話した」と、坪内博士が一と言いで、直ぐ一転して「そんな事も考えたが実は猶だ決定したのではない」と打消し、そこそこに博士の家を辞するや否、直ぐその足で私の許を訪い、「今、坪内君から聞いて来たが、君はこういういったそうだ。飛んでもない誤解で、毛頭僕はそんな事を考えた事はない、」と弁明した。復た例の癖が初まつたナと思いつつも、二葉亭の權威を傷つけないように婉曲に言い廻し、僕の推察は誤解であるとしても、そうした方が君のための幸福ではない乎と意中の計画通りを実行させようとした。が、口を酸くして何と説得しても「ソな考は毛頭ない、」とばかり主張つて、相談はとうとうそれきりとなつてしまった。現在自分の口から言出して置きながら、人に看透かされたと思うと直ぐコロリと一転下して、一

端口外した自家意中の計画をさえも容易に放擲^{ほうてき}して少しも惜ま^{おし}なかつたのはちよつと類の少ない負け嫌いであつた。こういう旋毛^{つむじまが}曲りの「アマノジャク」は始終であつて、一々記憶していないほど珍らしくなかつた。

二葉亭はこういう人物であつた。小説家であつて一向小説家らしくなかつた人、政治家を志ざしながら少しも政治家らしくなかつた人、実業家を希望しながら企業心に乏しく金の欲望に淡泊な人、謙遜なくせに頗る負け嫌いであつた人、ドグマが嫌いなくせに頑固^{がんこ}に独断に執着した人、更に最^もう一つ加えると極めて常識に富んだ非常識な人——こういう矛盾だらけな性格破産者であつて、この矛盾のために竟^{つい}に一生を破壊に終つた人であつた。

二葉亭の古い日記から二節を引いて以て二葉亭の面影と性格とを偲^{しの}ぶの料としよう。

「この世を棄てんとおもひたる人にあらねばこの世の眞の価値は知るべからず。」

「氣の鬱したる時は外出せば少しは紛るる事もあるべしと思へどもわざと引籠りて求めて煩悶するがかへつて心地よきやうにも覺ゆ。」

（大正四年八月稿、同大正十三年十月補筆）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「きのふけふ」

1916（大正5）年3月5日

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二葉亭余談

内田魯庵

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>